

1

ワークショップ

「ヴィオラ・ダモーレ 17世紀、18世紀の歴史的背景とレパートリー」

阿部千春 ヴィオラ・ダモーレ、蓮見岳人 通奏低音（リュート）

11月1日（金）14時～17時、アイガットサロン

1. 楽器について

楽器の歴史と構造

1-1. 17世紀 楽器の起源、共鳴弦なしの初期のヴィオラ・ダモーレ p 3

1-2. 17世紀終わりから 共鳴弦つきヴィオラ・ダモーレ p 5

1-3. バロック時代の調弦 p 6

2. バロック時代のレパートリーと記譜法：実音譜とスコルダトゥーラ

1. 17世紀 共鳴弦なしモデル、調弦 Grobe Partita p 7

2. 17世紀後半 ビーバー、南ドイツ 9線の楽譜！ p 10

3. 18世紀前半 グラウプナー(ダルムシュタット)、テレマン(フランクフルト)

テレマンのトリプルコンチェルトとグラウプナーの2つの調弦 p 10

4. 18世紀前半 イタリア ヴィヴァルディ、アリオステイ (イタリア/イギリス) p 12

5. 18世紀前半 バッハ p 16

6. 18世紀半ば以降 南ドイツ シュターミッツ、ルスト p 17

7. 18世紀半ば以降 教則本 ユベルティ、ミランドル p 18

3. 楽器試奏：スコルダトゥーラの楽譜を読んでもみる。 p 18

4. 希望者がいれば、バロックヴァイオリン、リュートの質問、レッスンも受け付けます。
(事前に問い合わせしてください)

バロック時代と言われる17世紀、18世紀前半において、発展した分野の一つに器楽音楽があります。それ以前、ポリフォニックな音楽が可能な鍵盤楽器やリュート、ヴィオラ・ダ・ガンバなどには独奏曲が存在しました。1600年頃から単旋律に通奏低音というスタイルがまずオペラの出現とともに広まり、器楽にも導入されました。こうして旋律楽器が活躍できる土壌が出現し、器楽音楽という形式が確立して行きます。当然楽器自体の改良、発展が促進されることとなりました。政治的、経済的なヨーロッパ以外の地域との積極的な交流も相まって、この時代には様々な試みがなされます。その一つの例がヴィオラ・ダモレです。弦楽器といえばガット弦が普通の時代、金属弦を用いそれを弓で擦るという発想、もしくはガット弦を用いた楽器に金属の共鳴弦を張るというアイデアは、中近東から入ってきたのではというのが一般的な説です。

„愛のヴィオラ”というネーミングのこの楽器は、17世紀半ばに現在のドイツ、オーストリアに出現します。構造上はヴィオラ・ダ・ガンバと同じ作りで、それに金属弦を張りヴァイオリンのような構えで弾くものでしたが、17世紀後半にガット弦プラス共鳴弦というモデルが出現し広まりました。18世紀、後期バロックには演奏するための弦が7弦、共鳴する弦が7弦と弦の本数が増え、カール・シュターミッツといった名手が活躍するようになります。その甘い音色は特にサロンの音楽活動の場で好まれました。

ワークショップでは、この楽器を紹介し、その音色を体験して頂くことを目的とし、希望者には実際に試奏して頂く場を設けます。百聞一見にしからず、当時の人々がサロンで楽しんだ響きを身近に体験してみませんか。

参考リンク、資料:

- Rachel Durkin : *The Viola d'amore its history and development* (Routledge London & New York, 2021)
- ヴィオラ・ダモレ協会
<https://www.violadamoresociety.org/en/viola-damore/about-the-viola-damore>
- wikipedia https://en.wikipedia.org/wiki/Viola_d%27amore
- <http://www.violadamore.com>
- 博物館にある楽器の写真入り情報検索
<https://mimo-international.com/MIMO/accueil-ermes.aspx>

楽曲検索:

- Heinz Berck : *Viola d'amore Bibliographie* (1986)
- Michael und Dorothea Jappe : *Viola d'amore Bibliographie bis 1800* (1997)
- wikipedia : https://en.wikipedia.org/wiki/Viola_d%27amore

1. 楽器について - 楽器の歴史と構造 -

1-1. 17世紀 楽器の起源、共鳴弦なしの初期のヴィオラ・ダモーレ

- 1649年 ドイツ・ハンブルク ヴィオラ・ダモーレ初登場

ワイマール公ヴィルヘルム4世に仕えていたヨハン・リッターが、ハンブルクからいくつかの新しい楽器を持ってワイマールに帰るとの手紙を主君に書いている。

„eine Virole mitt 5 seiten, welche genennet wird Virole de amour auf verstimte manier zu gebrauchen...“ (1台の5弦ヴィオール、ヴィオール・ドゥ・アムールと呼ばれ、変調弦で用いられる)

- 17世紀、イギリス

金属弦を張ったヴィオールもしくはヴァイオリンの存在。1679年のジョン・エヴリンの日記：「弓で弾く5本の金属弦の”ヴィオール・ダモーレ”、リラのように弾かれる」

- ジャン・ジャック・ルソー (Jean Rousseau, *Traite de la virole*, Paris, 1687)

- セバスティアン・ド・ブロサール

(Sébastien de Brossard, *Dictionnaire de musique*, Paris, 1703)

6本の鋼鉄または真鍮の弦を備えたトレブル・ヴィオールで、ハープシコードの弦に似ており、弓で弾くと「非常に心地よい銀色の音色」が出ると説明している。

- 18世紀の最初の10年間 イタリア、ドイツで使用された記録がある。

- ヨハン・マッテゾン (Johann Mattheson, *Das Neu-eröffnete Orchestre*, Thum 1713)

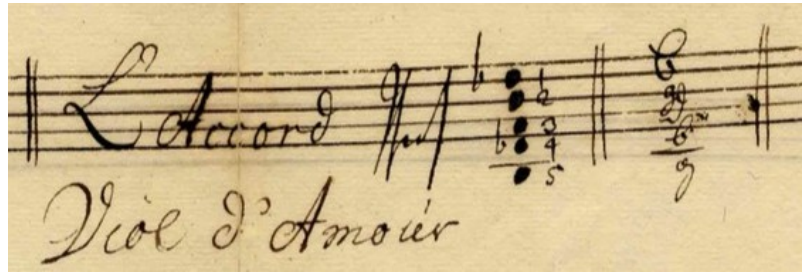
ヴィオラ・ダモーレの第1弦が1713年までにガット弦に交換された。

- ヨハン・ゴットフリート・ヴァルター 1732年の記述

(Johann Gottlieb Walther, *Musicalisches Lexicon*, Leipzig, 1732)

マッテゾンの記述に触れ、ヴィオラ・ダモーレには6本の弦があり、5本は金属弦、第1弦はガット弦であると述べている。

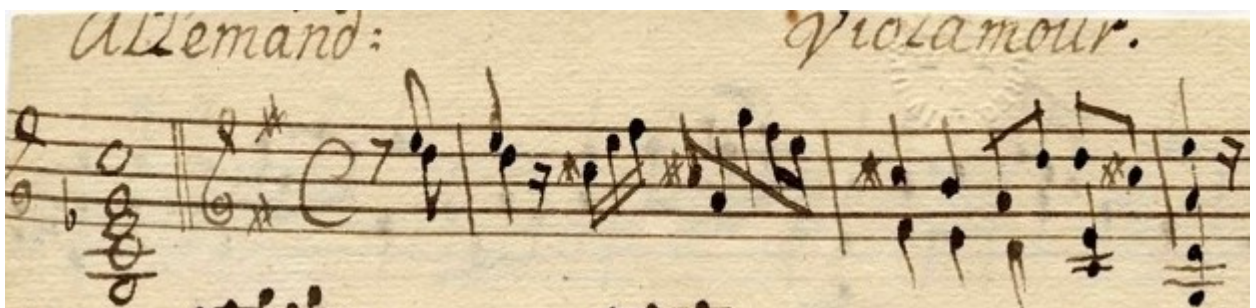
Anders von Düben (1673-1738)
 „Hur kort och ont är dock vårt liv“
 (「人生はなんと短く、苦しいものだろう」)



ソプラノ、x2VI, x2 Vla, x2 Vda, x2 Fl, bc

ヴィオラ・ダモーレは共鳴弦なし5弦、おそらく全て金属弦。ト短調の調弦が指定されておりスコルダトゥーラの記譜。

https://www2.musik.uu.se/duben/presentationSource1.php?Select_Dnr=678



Grobe (anonym. 17 世紀後半) Partia./ 1 Viola d'amour./ 1 Viold'gamb:/ et/ Bassus Continuus./ Mr. Grobe. ヴィオラ・ダモーレ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、通奏低音のための組曲 マッテゾンやヴァルターの記述にある、ハ短調、5弦の調弦。スコルダトゥーラ記譜。

https://www2.musik.uu.se/dubendev/presentationSource1.php?Select_Dnr=2122

LEONHARD MAUSSIELL、1742
 Nürnberg, Germanisches Museum
 / Deutschland

共鳴弦無しのモデルには、ヴァイオリンサイズの小さなものから大型のヴィオラサイズまで様々あり、弦の数も4弦から6弦と楽器により違っていました。



1-2. 17世紀終わりから 共鳴弦つきヴィオラ・ダモーレ

17世紀末から18世紀にかけて、ヴィオラ・ダモーレにはガット弦が使われるようになり、下の音域には巻き弦（ワイヤー - 通常は銀 -、でガット弦を巻いたもの）が使われるようになりました。共鳴弦は常に金属で、擦奏される弦と同じ調弦にするのが通常でした。

17世紀末には6本の演奏弦と6本の共鳴弦を備えたヴィオラ・ダモーレが主流になりつつありました。共鳴弦をつけるというアイデアは、インドからの交易路を通してイギリスに伝わり、ヴィオラ・ダモーレやバリトンといった共鳴弦つきの楽器がそこで誕生したのかもしれませんが。ロンドンでは名誉革命の後、市民の経済的な力が飛躍的に増大しました。彼らはエキゾチックなものを好んで生活に取り入れていました。また貴族王侯のステイタスであった音楽は市民層に広がり、楽器を習得することが流行ります。共鳴弦の響きはその社会層に憧れを持って迎え入れられました。

共鳴弦つきヴィオラ・ダモーレの最初の記述は、ダニエル・シュペーアの1687年の著書「音楽芸術の基礎教育」(*Grundrichtiger Unterricht der musikalischen Kunst*, p207-208)に見られます。イギリスでは、ヴィオラ・ダモーレのより大きなサイズ、イングリッシュ・ヴァイオレットも、ヴィオラ・ダモーレとともに上流階級の楽器として好まれていました。

ハインリヒ・イグナーツ・フランツ・ビーバー (Heinrich Ignaz Franz Biber、1644-1704) が活躍したザルツブルクでは、同時期にヨハン・ショルン (Johann Schorn) が6弦の共鳴弦つきヴィオラ・ダモーレを製作しており、ザルツブルクの聖三位一体教会にはこの時期制作された天井画に、ヴィオラ・ダモーレを奏する天使が描かれています。

18世紀半ばになると擦奏用7弦と共鳴弦7弦のモデルが主流となり、調弦も二長調に固定されるようになっていきました。この頃から共鳴弦を擦奏用の弦に合わせるのではなく音階として調弦し、どの調性にも対応できるように設定する方法も考案されました。

社会的なニーズにともなって音楽のあり方が変化し、市民社会の台頭とともに上流社会層での音楽愛好家が増え、一方で超絶技巧を披露する演奏家がヨーロッパ中で演奏ツアーを行うようになります。この時代の演奏家としてジョヴァンニ・トエスキ (Giovanni Toeschi、1735-1800)、ヨハン・ゲオルク・アルプレヒトベルガー (Johann Georg

Albrechtsberger、1736-1809)、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ルスト (Friedrich Wilhelm Rust、1739-1796)、カール・シュターミッツ (Carl Stamitz、1745-1801) といった名をあげることが出来ます。アントン・ユベルティ (Anton Huberty、ca. 1722-1791)、ルイ・トゥーサン・ミランドル (Louis Toussaint Milandre、18世紀後半) の作品付き教則本も出版されました。

1-3. バロック時代の調弦

ヴィオラ・ダモーレには、ヴァイオリンのような固定調弦 (5度) はありません。特に17世紀から18世紀にかけては、調弦は曲の調によって異なりました。1732年には、ヨハン・フリードリヒ・ベルンハルト・カスパー・マーヤー (Johann Friedrich Bernhard Caspar Majer) が *Neu=eröffneter Theoretisch=und Pracktischer / Music=Saal* の中で、17種類の声部の和音を提示しています。(もう一つの調弦はこの前のページにあります) <https://www.digitale-sammlungen.de/en/details/bsb10527435>

ちなみにマーヤーのこの楽器事典とも言える著作のヴィオラ・ダモーレの項には、共鳴弦なしの6弦の楽器が描かれています。



Die übrige Verstimmungen oder Accorde, vorhergehender Gattung mit neun Linien sind nachfolgende;

Die andere Gattung der Verstimmungen mit fünf Linien / wird nachfolgender weise vorstellig gemacht;

7

THOMAS RAUCH 1739

Breslau/Polen

© Museum für Musikinstrumente der Universität Leipzig



NICOLO GAGLIANO 1667 Napoli / Italy (Musée du Palais Lascaris, Nice/France)

擦奏用6弦、共鳴弦6弦

2. バロック時代のレパートリーと記譜法：実音譜とスコルダトゥーラ

1. 17世紀 共鳴弦なしモデル Grobe (作者不詳、17世紀後半) Partita

北ドイツ・スカンジナビアのハ短調調弦、スコルダトゥーラ譜。

[https://imslp.org/wiki/Partita_in_C_minor_\(Anonymous\)](https://imslp.org/wiki/Partita_in_C_minor_(Anonymous))

Partia

Allemande

Mr. Grobe

Viola d'amour

Viola da gamba

Bassus Continuus

6 b 6 6 b 6

3

(Missing)

6 6 6 6 6 b

6

6 6 5 6 6

8

4 3 6 6

ウプサラ/スウェーデンの手稿

(スコルダトゥーラ譜)

Allemand: violamour.

Partia

Allemande

Mr. Grobe

Viola d'amour

Viola da gamba

Bassus Continuus

3

(Missing)

6

8

2. 17世紀後半 ハイน์リヒ・イグナーツ・フランツ・ビーバー (Heinrich Ignaz Franz Biber, 1644-1704)、南ドイツ

9線の楽譜! ヴィオラ・ダモーレのレパートリー中、最も美しいトリオソナタ!!

ソナタ第7番 技巧的で楽しい合奏集より (VII. Sonate aus der Sammlung Harmonia artificiosa-ariosa, 1696)

[https://imslp.org/wiki/Harmonia_artificioso-ariosa_\(Biber%2C_Heinrich_Ignaz_Franz_von\)](https://imslp.org/wiki/Harmonia_artificioso-ariosa_(Biber%2C_Heinrich_Ignaz_Franz_von))

PARTIA VII

PRAELUDIUM
Grave

The image shows a musical score for a prelude in G minor, 3/4 time, marked 'Grave'. It is for a three-part setting of the viola da amore. The score is arranged in five systems. The first system includes an 'Accord' section for the two violas. The second system shows the main melodic lines for Viola d'amore I and Viola d'amore II. The third system shows the accompaniment for Viola d'amore I and Viola d'amore II. The fourth and fifth systems show the basso part, which provides a harmonic and rhythmic foundation with sustained chords and moving bass lines. The key signature has two flats (B-flat and E-flat), and the time signature is 3/4. The tempo is 'Grave'. The score is numbered '5' at the beginning of the second system.

3. 18世紀前半 グラウプナー(Christoph Graupner 1683-1760、1709年以降ダ
ルムシュタット)とテレマン (Georg Philipp Telemann 1681-1767、1721年ま
でフランクフルトで活躍)

テレマンのトリプルコンチェルトとグラウプナーの2つの調弦

グラウプナーの作品には2種類のヴィオラ・ダモーレの記譜法が見られます。1728年以
前 (B-d-g-c'-f'-b)と以降 (G-d-g-d'-g'-c'')で全く違う調弦法が使われていたことがそこ

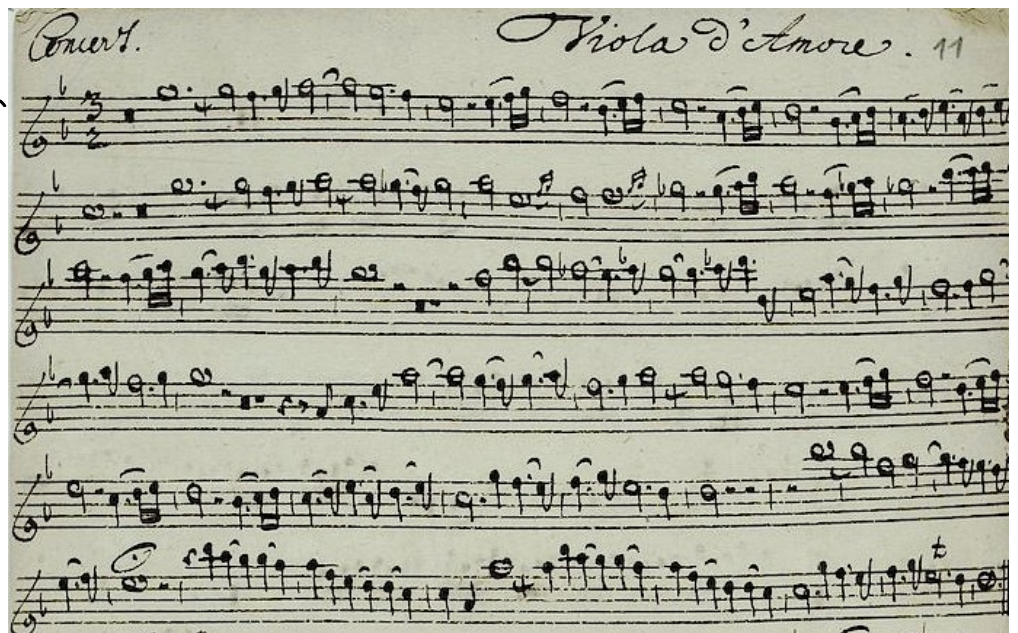
からわかります。テレマンのフルート、オーボエ・ダモーレ、ヴィオラ・ダモーレのためのトリプルコンチェルトはグラウプナーの1728年以前の記譜法なので、このコンチェルトは彼がフランクフルトにいた1721年までの時代のもと考えられています。フランクフルトとダルムシュタットは地理的に近く、お互いに音楽家を融通しあっていた記録が残っています。

このコンチェルトのヴィオラ・ダモーレは、国際楽譜図書館プロジェクト(IMSLP)のファクシミリを見ても分かる通りフランス式ヴァイオリン記号で書かれています。実際に出てくる音はその1オクターヴ下です。ダルムシュタットではヴィオラ・ダモーレはヴィオラと同じ音域の楽器として使われていました。グラウプナーは、また、ヴィオラ・ダモーレとファゴットを同じ声部担当という扱いで使っています。(実際はヴィオラ・ダモーレはファゴットよりも1オクターヴ高い) このフランス式ヴァイオリン記号での楽譜を見ると、ヴィオラ用のアルト記号と考えて読めばその音が実音として出てきますので、ヴィオラ弾きにとっては非常に便利だったはずですが、当時、音楽家はその場の状況に応じて移調して演奏する技術が求められていましたが、その読みかえは実際のところこのように記号を読み替えることによって行われていました。

この時代のダルムシュタットで使用されていた楽器のモデルは共鳴弦のないものだったと思われます。もしこのモデルが使用できない時は、6弦の共鳴弦付きの楽器を用い、擦奏弦は全て張り替えてこの調弦にし(ヴィオラの音域になるので)、共鳴弦はこの調弦にあわせてセッティングします。もし7弦の共鳴弦付きの楽器での演奏なら、1弦を外して2弦以降を使うようにすれば、張り替えなくても対応できるかと思います。弦によっては張りが弱すぎたりするかもしれませんので、ゲージを変えて調整してみてください。

[https://imslp.org/wiki/Concerto_for_Viola_d'amore%2C_Oboe_d'amore_and_Flute%2C_TWV_53:E1_\(Telemann%2C_Georg_Philipp\)](https://imslp.org/wiki/Concerto_for_Viola_d'amore%2C_Oboe_d'amore_and_Flute%2C_TWV_53:E1_(Telemann%2C_Georg_Philipp))

ダルムシュタットの草稿、
ヴィオラ・ダモーレのパート譜
(スコルダトゥーラ)



Concerto mi maggiore

per
Viola d'Amore, Oboe d'Amore, Flauto Traverso,
2 Violini, Viola e Cembalo
TWV 53:E1

Georg Philipp Telemann
(1681-1767)

Viola d'Amore

Oboe d'Amore

Flute

Violin 1

Violin 2

Viola

Basso

5

Vla. d'A.

Ob. d'A.

Fl.

Vln. 1

Vln. 2

Vla.

Vc.

4. 18世紀前半 イタリア ヴィヴァルディ、アリオステイ (イタリア/イギリス)

- ヴィヴァルディ (Antonio Vivaldi 1678-1741 ヴェネチアで活動) 曲の調性に合わせた調弦法 (スコルダトゥーラ)

13 実音譜

- 6曲のソロの協奏曲 RV 392 D-Dur、RV 393 d-Moll、RV 394 d-Moll、RV 395 d-Moll、RV 396 A-Dur、RV 397 a-Moll
- ヴィオラ・ダモーレとリュートのための協奏曲 RV 540 d-Moll
- ヴィオラ・ダモーレ、2つのホルン、2本のオーボエ、ファゴットと通奏低音のための協奏曲 RV 97 F-Dur

スコルダトゥーラ譜

- アリア “*Tu dormi in tante pene*” アルト、ヴィオラ・ダモーレ、弦合奏と通奏低音 d-Moll オペラ *Tito Manlio* (マントヴァ、1719) より
d-a-d'-f'-a'-d''
- アリア Es-Dur オラトリオ *Juditha triumphans* RV 644 より
b-es'-b'-es''
- アリア d-Moll Psalm 126 *Nisi Dominus* RV 608 より
d-a-d'-f'-a'-d''

ヴィヴァルディは曲の調整に合わせて調弦を変えています。オペラなどおそらく上演の中で楽器を持ち替えての演奏が必要な際は、スコルダトゥーラ記譜を使っていたようです。協奏曲も、奏者が必要であればスコルダトゥーラ譜を作成して使用することが可能です。

- アリオスティ (Attilio Ariosti 1666-1729) 独自の記譜法 !!

イタリア・ボローニャに生まれ、地元で活動を開始、1700年ごろにはドイツ・ベルリンの宮廷での記録が残っています。その後ウィーンで皇帝ヨゼフ1世の元、外交官として働き、ヨゼフ1世亡き後、おそらくフランスに滞在、その後1716年にロンドンでヘンデルのオペラの上演の際ヴィオラ・ダモーレの名手としてデビューします。ロンドンではオペラの作曲も手がけています。

アリオスティによるヴィオラ・ダモーレの作品には15曲のソナタ(弟子のユーハン・ヘルミク・ルーマンによる筆写譜がスウェーデン・ストックホルムに保存されており、ストックホルムソナタと呼ばれている)、6曲のレツィオーニ(1724年出版)、カンタータ *Pur al fin gentil viola*、ウィーン時代の1707年のオペラ *Marte placato* のアリア *Sa il destin'*が存在します。

15曲のソナタはルーマンの手によるヴァイオリン記号での実音譜が残されています。モダン譜はこちら [https://imslp.org/wiki/Recueil_de_pièces_\(Ariosti%2C_Attilio\)](https://imslp.org/wiki/Recueil_de_pièces_(Ariosti%2C_Attilio))

興味深いのは、1724年に出版されたレツィオーニの記譜法です。アリオステイは、様々な音部記号をそれぞれのポジション用にあてがってスコルダトゥーラ譜として読むシステムを開発しました。ヴァイオリン奏者がその音部記号でスムーズにポジション移動できるように考えたのがこちらの例です。

[https://imslp.org/wiki/6_Cantatas_and_6_Viola_d'Amore_Lessons_\(Ariosti%2C_Attilio\)](https://imslp.org/wiki/6_Cantatas_and_6_Viola_d'Amore_Lessons_(Ariosti%2C_Attilio))



Refentamente il Violino non ha più il suo accordo, e non ha più la chiave sua benché ne troverete la forma, essendo nelle seguenti composizioni una propria accordatura, e proprie chiavi, le quali però tutte si uniformano ad una sola, e la loro posizione serve per guida alla mano, et alle dita senz' altro imaginabile valore; il tutto conforme l'esempio.



Le quattro chiavi convengono in una sola, e la loro posizione non serve ad altro, che per regolare la mano, e le dita come si è detto, non avendo per se stesse altro valore.

Gli accidenti che sono li :b: molli, li :b: quadri, e li diesis anno correlazione con le dita solamente, e non altro. L'avvertimento v'è necessario, acciò che trovando un :b: molle nella stessa riga della chiave (cosa inusitata) non restiate sorpresi.

Ed avvertite, che gl' accidenti della Chiave principale, servono ancora a tutte le altre chiavi che incontrerete con lo stesso valore: non essendosi fegnati questi per evitare la confusione, che potrebbe rendere la continua variazione di esse.

1. Questa chiave farà la base per la situazione della mano; cioè a dire, ella vi obbliga di postarla al luogo ordinario, e dovrà trattarsi come chiave di Violino nella tastatura; come pure tutte l'altre, non considerando in esse, che li puri accidenti per regola alle dita, e non altro.

2. Porta la mano un tono più avanti, quando succede alla prima chiave, e quando succede alla terza chiave, porta la mano un tono più indietro.

3. Porta la mano a mezzo il manico.

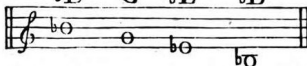
4. Porta la mano un tono più alto del mezzo manico.

Della

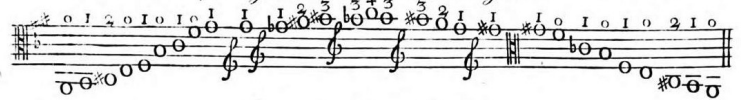
各曲の調弦法とその調弦での音階が表で示されています。

Accordatura I

$\flat B$ G $\flat E$ $\flat B$

Chiave di G solreut 

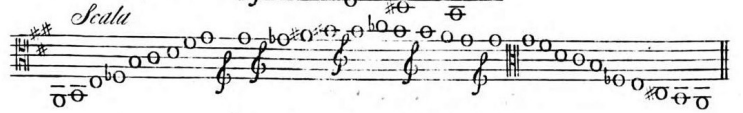
Scala della prima Accordatura con la posizione delle chiazze e della mano per regola a tutte l'altre che seguono



Accordatura II

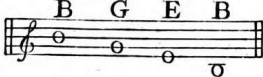
A E $\sharp C$ A

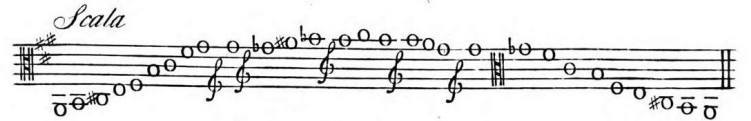
Chiave di G solreut 

Scala 

Accordatura III e V

B G E B

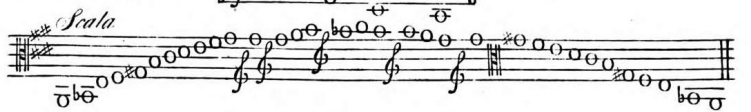
Chiave di G solreut 

Scala 

Accordatura IV

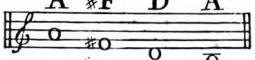
C F C A

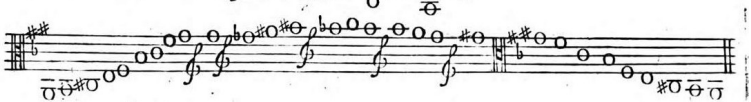
Chiave di G solreut 

Scala 

Accordatura VI

A $\sharp F$ D A

Chiave di G solreut 

Scala 

レツィオーニ5番の最初(スコア)。アルト記号で始まり(第1ポジション)、一段目の最後でト音記号によって第3ポジションが指定されています。

Vivace **Lezione V** (44)



5. 18世紀前半 ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (Johann Sebastian Bach, 1685-1750)

実音譜としてのスコアが残されているのみで、調弦法は指定されていません。

- 曲の調性に合わせた調弦

カンタータ 152 番 (ワイマール、1714)

おそらく当時のワイマールでは共鳴弦なしのモデルが使われていたと思われます。音域からヴィオラサイズの大きめな楽器が想定されます。

- 曲が書かれた場所/街で使われていた、その当地の調弦

例として： ヨハネ受難曲 (第1稿、第2稿以降は弱音器をつけたヴァイオリン用に書かれています。ライプツィヒ、1724)

アリオゾは Es-Dur、アリアは c-Moll、よって推測される調弦は

c-Moll 調弦 c – g – c' – es' – g' – c''

一方でライプツィヒで成立した他のカンタータ (カンタータ 36c、カンタータ 205)でのヴィオラ・ダモーレの調弦はおそらく a – cis' – e' – a' – e'' であり、この調弦が当時のライプツィヒでのスタンダードと見なされます。この調弦を1度下げた g – h – d' – g' – d'' での可能性も検討されます。また、当時のライプツィヒにおけるヴィオラ・ダモーレのタイプが、共鳴弦なしのものであったという説もあります。

スコルダトゥーラ譜 (g – h – d' – g' – d'') の例 ヨハネ受難曲 第1ヴィオラ・ダモーレ

Adagio

実音譜 ヨハネ受難曲 第1 ヴィオラ・ダモーレ

19. Arioso (Basso)

(Betrachte, meine Seel' / Bethink thee, o my soul)

Adagio

6. 18世紀半ば以降 南ドイツ シュターミッツ、ルスト

ニ長調調弦 (A - d - a - d' - fis' - a' - d'')

- カール・フィリップ・シュターミッツ (Carl Philipp Stamitz、1745-1801)

ヴィオラ・ダモーレの名手としてヨーロッパ中に有名でした。

https://imslp.org/wiki/Category:Stamitz,_Carl_Philipp

- フリードリヒ・ヴィルヘルム・ルスト (Friedrich Wilhelm Rust、1739-1796)

https://imslp.org/wiki/Category:Rust,_Friedrich_Wilhelm

7. 18世紀半ば以降 教則本 ユベルティ、ミランドル

ニ長調調弦 (A – d – a – d' – fis' – a' – d")

- アントン・ユベルティ (Anton Huberty, ca. 1722-1791)

ファクシミリ: 新しいメソッド- メッセージ ヴィオラ・ダモーレ作品集
(*Neu method-messige viol d'amor stüke*, Wien 1760)

この教則本の9曲のソナタはIMSLPに収録されている。

https://imslp.org/wiki/Category:Huberty,_Anton

- ルイ・トゥーサン・ミランドル (Louis Toussaint Milandre, 18世紀後半)

[https://imslp.org/wiki/Méthode_facile_pour_la_viole_d'amour
%2C_Op.5_\(Milandre%2C_Louis-Toussaint\)](https://imslp.org/wiki/Méthode_facile_pour_la_viole_d'amour_%2C_Op.5_(Milandre%2C_Louis-Toussaint))

3. 楽器試奏：スコルダトゥーラの楽譜を読んでみる。

作者不詳 (オーストリア・ゲットヴァイクのベネディクト会修道院の手稿 HS 4806
より、17世紀後半)

ヴィオラ・ダモーレのための組曲 第14番 より Gavotte ガヴォット